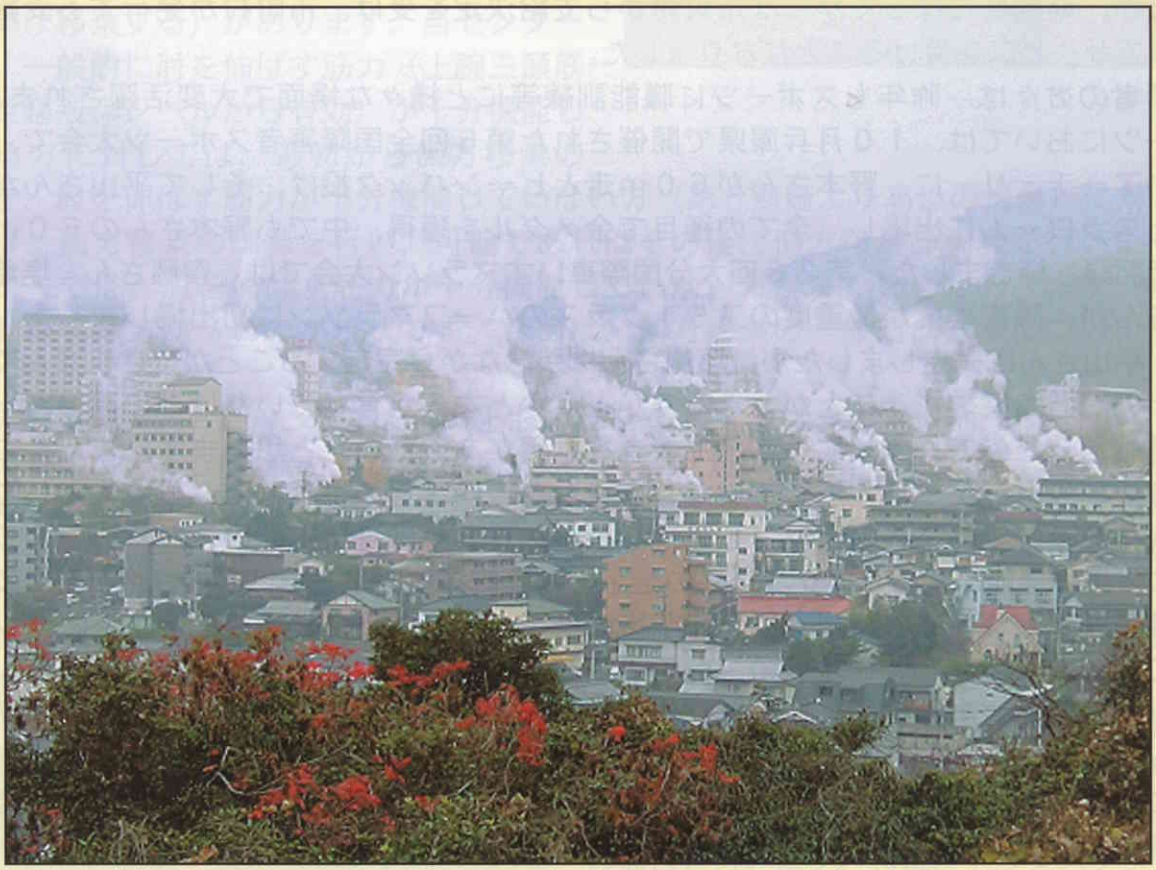
センターだより

第66号

発行
平成19年1月



別府市鉄輪（かんなわ）の湯けむり

指定障害者支援施設

国立別府重度障害者センター

新年を迎えて

所長　江原　徳至

新年あけましておめでとうございます。皆様方におかれましては、つつがなく新春をお迎えになられたこととお喜び申し上げます。

昨年は、１０月から障害者自立支援法が全面施行されスタートしました。当センターも大分県から指定障害者支援施設の指定を受け、昼間は自立訓練（機能訓練）を夜間は施設入所支援を実施する施設となりました。それに伴い利用方法が変わりました。これまでは、利用希望者が直接センターへ申し込んでいましたが、新制度になってからは市町村から支給決定を受け、市町村が発行する受給者証を持ってサービスを受けることになりました。

利用者の方々は、昨年もスポーツに職能訓練等にと様々な場面で大変活躍されました。スポーツにおいては、１０月兵庫県で開催された第６回全国障害者スポーツ大会で、森田さんがアーチェリーに、野本さんが６０ｍ走とビーンバック投げ、そして平山さんが６０ｍ走とスラロームに出場し、全ての種目で金メダルを獲得、中でも野本さんの６０ｍ走は大会新記録に輝きました。第２６回大分国際車いすマラソン大会では、齋藤さん、塩飽さん、平山さんが、障害程度が最重度のＴ５１クラスのハーフマラソンに初出場しました。齋藤さん、平山さんは完走しましたが、塩飽さんは残念ながら完走することができませんでした。５ｋｍの関門を突破することができるのかどうかと本人が言っていたほどの高いハードルへの挑戦だったので、参加することに大きな意義があったのだと思います。また、この大会には以前当センターに入所していた井上さんが、四度目の挑戦の末、日本人として初めてＴ５１クラスでのフルマラソンを完走しました。これは身体機能の差からいうとＴ５４クラス（身体機能が一番良いクラス）の選手の世界記録に匹敵するほどの快挙だそうです。

訓練の成果としては（利用者は、修了後の職業自立を図ることを目的として、パソコン関連の訓練と手織り、トールペイントの手工芸訓練を行っています。）、山津さんが、佐賀県の「第６回障害者作品展」に手織り作品を出展し知事賞を授賞しました。また、初級システムアドミニストレータ試験や簿記試験などには５人の利用者が合格しています。このように日々の訓練に前向きに取り組み、自分自身の立てた目標に向かって挑戦する姿はとても素晴らしく、周りにいる私たちもたいそう励みになりました。

これからの課題としましては、利用者の身体的機能の向上と併せ、個々に応じて職業的自立が実現できるようにすることが重要です。そのために、各利用者の可能性を見極めながら、訓練方法、使用器具、新しい訓練種目などの検討をこれからも続けていきたいと考えています。同時に、当センターのリハビリ訓練方法、評価方法等の成果を積極的に全国の施設・病院へ提供し続けることも、障害者のリハビリ向上を図るためには重要なことだと考えています。

今後も、頸随損傷をはじめとする重度身体障害者の方々の自立支援に向け、職員一丸となって取り組んでいきたいと思いますので、本年も昨年と変わらぬご支援・ご協力を賜りますようどうぞ宜しくお願い申し上げます。

シリーズ　ＯＴ訓練について

作業療法士　後藤　真由美

トランスファーボード（コの字型）

脊髄損傷者（以下、脊損者）において、車いすから何かに乗り移る（以下、移乗）ということは、重要な動作のひとつです。例えば、車いすからベッド・トイレ・風呂・自動車などへの移乗があります。脊損者が行う移乗動作には、主に側方移乗（車いすを移乗する対象物に対して斜めに付け移乗する）と前方移乗（車いすを移乗する対象物に対して垂直に近づけて両下肢をベッド上に挙げ移乗する）があります。当センターでは、一般的に肘を伸ばす筋力（上腕三頭筋、第７頸髄残存レベルから有効）が十分機能している方に対しては、最初から側方移乗の訓練を、肘を伸ばす筋力が十分機能していない方（第６頸髄より高位の損傷）に対しては、最初は、前方移乗の訓練を行い、可能であればその後、側方移乗の訓練を行います。当センターでは、肘を伸ばす筋力が十分機能していない方が多くいるため、まず、前方移乗を訓練する方が多いのが現状です。今回は、前方移乗の一般的な方法について説明します。

前方移乗訓練を行うためには、両上肢で自分の体を支えたり・床面を押したりする、上肢の筋力やバランス能力等が必要です。それら移乗に必要な能力が向上することに合わせて、移乗動作の訓練を開始します。訓練の内容は降車（車いすから降りる）・乗車（車いすへ乗る）の２つに分けられ、訓練室で動作獲得後、実際に居室等日常生活で行います。例えば、ベッドへの前方移乗動作の場合は、ベッドに足をあげる動作・前に進む動作・お尻の向きを変える動作・車いすに乗る動作・靴を脱ぎ履きする動作など、訓練を進めるにあたり一人一人違った課題が出ます。これらの課題に対して、観察・評価を行い、訓練内容や動作方法の工夫・環境整備（足挙げ紐・体幹枕・膝ベルト・すべり布・トランスファーボード・足底板等）や自助具の適合を行います。特に、トランスファーボードは細部の調整が必要となりますので、作業療法士が、対象者の動作を確認しながら慎重に作製します。作業療法でのベッドへの移乗動作は、訓練開始から長い時間をかけて獲得を目指す動作のひとつです。動作獲得には、理学療法での基本動作訓練は欠かせません。それぞれの動作訓練はどちらも重要ですので、根気よく継続した訓練を行うことが大切です。

前方移乗

第26回大分国際車いすマラソン大会

運動療法士　木畑　聡

「塩飽さん、あと２ｍ！もう少し」。舞鶴橋の坂の最後で、コースを右にそれていく塩飽さんを反対側車線とを仕切る三角コーンが阻みます。周囲で応援している人たちが後方からそっと後押しするように手拍子とともにゆっくりと囲み始めます。声援に守られながらかろうじてハンドルを切り、最初の難関舞鶴橋を登りきることができたのです。弁天大橋ではセンターから応援の皆さんが待っています。そこまでたどりつくことを祈りながら、私は舞鶴橋を後に次のポイントに移動したのでした。

ウォーミングアップ中の齋藤選手

平成18年10月29日11時03分、近年ではめずらしく風も穏やかな晴天のコンディションの中、第26回大分国際車いすマラソン大会のハーフマラソンがスタートしました。今年センターからは斉藤さん平山さん塩飽さんの３名が出場しました。

いずれもT51クラス（車いすマラソンでは最も機能的に重度のクラス）での参加です。3人が目標としている完走を阻む５ｋｍ関門の突破に向けて挑戦です。

私は弁天大橋の中央部３ｋｍ地点で、やってくる選手を待ちます。時計は、16分が過ぎようとしているところです。まず、平山さんが通過していきます。大会の直前で体調を崩していましたが元気そうです。17分が過ぎました。そろそろ５ｋｍ関門通過がきわどい時間です。17分30秒、斉藤さんが前方の１点だけを見つめながら、奥歯をぎゅっとかみ締め通過していきます「残り9分30秒、行けますよ！ぎりぎりです」。ちょっとこちらを見たようです。気づいてくれたかな。

その後、伴走をしている職員から私に次々と電話がありました。平山さんと斉藤さんが５ｋｍ関門を通過したこと。塩飽さんが目標としていた弁天大橋の登りまで到達したこと…。今大会では、平山さんと斉藤さんの２名が完走することができました。平山さんについては、クラス３位入賞です。塩飽さんは、完走はなりませんでしたが、目標としていた地点まで到達することができました。３名の選手は「やればできる」という大きな可能性を私たちに示してくれました。今年も新たな挑戦者とともに大分国際車いすマラソンに取り組んで行きます。

レース後の齋藤選手と塩飽選手

第6回全国障害者スポーツ大会

生活支援員　木村　宏輝

「はばたこう　ともに今から　ひょうごから」のスローガンのもと、第６回全国障害者スポーツ大会「のじぎく兵庫大会」が平成１８年１０月１４日から１６日にかけて兵庫県で開催されました。大分県選手団は、団体競技や個人競技合わせて４９名の選手が参加し、センターからは陸上競技女子２部に野本さん、同じく陸上競技男子1部に平山さん、アーチェリー競技女子の部に森田さんの３名が出場しました。

満面の笑みの野本選手

選手団結団式を終えて、大分空港から伊丹空港まで空路で兵庫県入りをしました。１３日は公式練習会ということで、それぞれの競技会場での最終調整と練習を行いました。１４日の開会式は、秋晴れの下、全国から選手団・来場者を合わせて２万人以上が、ユニバー記念競技場に集まりました。式典や炬火台への点火、選手団への歓迎の演技など、各選手団はもとより当センターから参加した選手達も、これから始まる競技への思いを新たにしたようでした。陸上競技は、神戸総合運動公園ユニバー記念競技場、アーチェリー競技は、しあわせの村運動広場とセンターの選手も各競技会場にわかれ競技が行われました。競技期間中は、連日暑いくらいの快晴のもと、各競技会場において全国から集った選手達が熱戦を繰り広げました。大分県選手団も日頃の練習の成果を各種目で発揮しました。センターから陸上競技に参加した平山さんは、向かい風もありましたがスラローム１で９４秒３の記録を出し、また大会３日目には６０ｍ走で１８秒６５の記録を出して、２種目で金メダルを獲得しました。野本さんは、大会初日はビーンバック投げで２ｍ５３ｃｍの記録を出して金メダル。大会３日目の６０ｍ走では、大会記録を２秒以上も上回る４９秒６１の大会新記録を出して、２種目で金メダルを獲得しました。

アーチェリー競技に出場した森田さんは、コンパウンド３０ｍダブルラウンド種目で時折強い風が吹く中、７２射で４１３点を出して、金メダルを獲得しました。センターから出場した３選手とも各競技種目で金メダルを獲得できました。

大会前は、５泊６日ということで、いろいろと心配な面もありましたが、センターから参加した選手もメダルを獲得して無事に大会を終えることができました。スポーツを通し、いろいろな人と接する事ができ、センターだけでは体験できないことを、大会の思い出をそれぞれに持ち帰ることができました。センターに戻ってから数日後、広瀬知事への結果報告会が県庁で行われました。２００８年は大分県で第８回全国障害者スポーツ大会が開催されます。

平山選手のスラローム競技

利用者アンケート調査の実施

庶務課長　下田　俊孝

今回、施設利用者の皆さんに、当センターが提供する施設サービスについて１６項目にわたるアンケート調査を実施しました。

（質問内容は次頁の通り）

その経緯は、当センターの障害者支援施設としての施設の資質を問う匿名の手紙が寄せられたことから、利用者全員から施設サービス全般についての意見をお聞きすることとしたものです。

実施方法は、パソコンを利用して回答して頂くものです。また、利用者の方が気兼ねすることなく自由な意見を記載できるように、その回答は、特定職員（庶務課長）だけが、見ることができるシステムとしました。

対象者５４名のうち、２３名（回答率４３％）から貴重なご意見を得ました。その内容は、「希望通りのリハビリが受けれない。」、「急がせたり、物扱い的な言動がある。」、「職員同士の情報交換がうまくいっていない。」等々の厳しいものでした。

各部門では、アンケートの結果を踏まえて、話し合いを行いました。

職員としては、良いことだと思って行っていたことも、利用者からは必ずしも、そう理解されていないこと。職員の考えが、適切に伝わっていないこと等がわかり、今までの仕事の進め方について反省しました。

そして反省した点、改善すべき点や、センターの考え方を利用者に報告しました。

これからも利用者の意見を聞きながら、施設運営を進めたいと思います。その為、その一つの方法として、来年度も今回と同様にアンケート調査を実施して利用者の皆さんから、施設生活で施設や職員に対する意見を真摯に受けていきたいと考えています。

そしてよりよい頸髄損傷者のリハビリテーション施設として、利用者の皆さんから利用して良かったと感謝される施設運営を行って参りたいと思います。

利用者アンケート調査の質問内容

センターでは、よりよい福祉サービスを提供することを目標として、利用者の皆様方にセンターに関するアンケートを実施することといたしましたので、ご協力方お願い致します。（いずれの質問にも「いいえ」と回答された方は具体的に内容を記入して下さい。との設問がある）

質問１　利用契約締結時に的確な説明、分かりやすい資料等の提供がありましたか。

１：はい　　２：いいえ　　３：どちらとも言えない（普通）

（注）以下、各設問とも「１～３」の選択として、その他、自由に意見を記載する方法とした。

質問２　提供されているサービスは貴方の希望どおりでしたか。

質問３　職員の言葉遣いは、貴方や家族に対し気配りが感じられましたか。

質問４　職員は、貴方の話しや相談によく応じてくれますか。

質問５　職員は、貴方の要望に対し、気持ちよく対応してくれますか。

質問６　貴方の健康状態の配慮は十分と感じていますか。

（疾病への対応、健康状態の説明、投薬等）

質問７　センターに入所して、あなたの身体状況等は良くなりましたか。

質問８　センターで受けている看護サービスについて満足していますか。

質問９　センターで受けている介護サービスについて満足していますか。

質問１０　理学療法訓練について、満足した訓練がなされていますか。

質問１１　作業療法訓練について、満足した訓練がなされていますか。

質問１２　スポーツ訓練について、満足した訓練がなされていますか。

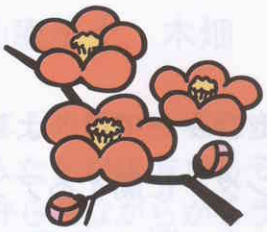
質問１３　職能訓練について、満足した訓練がなされていますか。

質問１４　センターの食事は美味しく食べられますか。

質問１５　センター内の設備全般について満足していますか。

質問１６　全体的にみて、センターでの生活について満足していますか。

実習生等の受け入れ状況



当センターでは、毎年、理学療法士、作業療法士、介護福祉士及び社会福祉士の養成校等からの実習を受け入れています。

実習では、福祉施設の役割や各専門分野におけるリハビリテーションの内容、評価、訓練プログラムの立案、実際の訓練や訓練内容の変更、他職種とのチームアプローチの重要性等の体験を行いました。

また、納涼盆踊り大会、文化祭等の行事に積極的に参加をし、実際場面での利用者とのコミュニケーションを図りました。

また、施設の地域開放、福祉の啓蒙を目的に近隣の中学生の職場体験学習も実施しました。

実習生の受け入れ状況（平成１８年中）

区　分	養成校等	受入人数
理学療法士	5	5
作業療法士	4	5
運動療法士	1	1
介護福祉士	3	28
社会福祉士	2	4

中学生の実習の感想

職場体験の際は、大変お世話になりました。五日間、指導課の職場や診療、理学・作業療法の訓練、介護している所を見たり、実際に車いすを体験しました。利用者のみなさんが街に出た時にどれだけ大変になるのか、働く事の大変さを強く感じました。

今回の職場体験で学んだ事を、これからの進路学習や生活に生かしていきたいと思います。

中野　優（青山中学校）

行事アラカルト

① 第１５回文化祭を終えて

国立別府重度障害者センターで行う文化祭は、地域の人たちにセンターでのリハビリテーションの実態を知ってもらうことや交流を目的に毎年実施しています。

今年は、１０月８日（日）に第１５回文化祭を実施しました。天候は曇りで風も強かったのですが、最後まで雨に降られることもなく実施することができました。

今年は「イケイケどんどんニコニコ文化祭」をテーマとし、地域の人たちを交え、利用者、職員と楽しく盛り上がる文化祭を目指し、５月当初から開催に向けて準備をしてきました。当日は、別府青山高校吹奏楽部の演奏で華やかな開催となりました。リハビリの様子やトールペイント、手織り、パソコンを使ったポスター等の作品を紹介するとともに、利用者がその場で作成した名刺やプリクラ等の販売や手織り・トールペイントの講習会も行う等、様々な方法によりセンターを紹介しました。たくさんの人々に参加していただき賑やかな楽しい１日になりました。来年も更に利用者・職員が協力し楽しい文化祭を開催する予定です。

①「文化祭の模擬店」
模擬店の準備に忙しい「庶務課屋」。
今や文化祭の名物模擬店である。

②「蛍の答礼」
児童と利用者チームの
ボッチャゲームでの交流。

③「ショッピング」
何を買いに行こうか。
まずはみんなで相談。